BS11 報道ライブ INsideOUT　寺島実郎の「未来先見塾」～時代認識の副読本～
（仁坂知事と寺島氏の対談）
放送日＝平成２８年６月３日（金）２２：００～２２：５４

＜対談内容＞
【前半】
寺島：仁坂さん今日はお忙しいところ、どうもありがとうございます。

仁坂：今日はありがとうございます。

寺島：こういう形で和歌山県庁にまで押しかけて、仁坂さんとお会いするというのは、僕にとっては大変うれしいです。
　仁坂知事とは、私、非常に複雑な縁を持っていまして、今までも大変お世話になっているんですけども、実は私の頭の中に経産省の役人だった時代の仁坂さんがもちろんあるわけです。考えてみると、この紀伊半島というのは、この日本にとって奈良、京都、大阪なんていう、かつての歴史的な中心だったところの南にでーんと控えていて、この東側の三重県がやはり経産省出身の鈴木英敬知事、この番組にも去年の段階でもってお出にいただいて話をしたこともあります。今般いよいよ和歌山っていうことで、まさに紀伊半島の両側を経産省出身の知事がやっておられる。タイプは全然違うんだけども、鈴木英敬さんも非常にアクティブでユニークで、どちらの知事も自分の地頭で考えて、県を引っ張っておられるというイメージがあるんですね。経産省の役人でおられたんだけども、外務省に出られて、３年間、まさにブルネイっていうＡＳＥＡＮの中でも大変ユニークなエネルギーで光を放っている国の大使をおやりになって、その仁坂さんが、私がかつて世話にもなっていた総合商社の業界団体である日本貿易会という団体があるんですけども、そこの専務理事に仁坂さんが来られるっていうことになって、私は運営委員会みたいなところに入っていたもんだから、仁坂さんとお会いしてたいへんユニークで物の考え方の柔らかい方が来られて、さていよいよ一緒にこの業界の将来を考えようかなと思っていたら、和歌山県知事選挙に出られるということで引っ張られた。いろいろ悩まれたと思うんですけども、政治好きな役人って人いますけども、全くそうじゃない空気を放っていた方で、和歌山県知事に「よし、やってみるか」と思われたあの時のことを振り返って、ちょうど１０年前ですよね、今からね。

仁坂：そうですね。私はずっと、人生はあまり自ら企んでいろんなことをやるというのは、

どうもあまり性に合わないなあと。企んだのは、その当時の通産省に入りたいと思って、一生懸命企みまして、４月ぐらいから一生懸命勉強して、７月ぐらいに公務員試験があるので、それは企んで入りたかったんです。だけど、そのあとは任命されると「ここへ行きなさい」「あそこに行きなさい」と出向しまして、これがまたいいんですよ。友達もできるしね。とどのつまりは「あなた大使になりなさい」といって、それで「ははーっ」と言って辞表を出すことになって、それでいわゆる天下りですね。「日本貿易会どうですか」と言われ、「名誉なことです」って言って、行かせていただいて「さあ張り切ろう」となったら、そうしたらたまたま前の人（前和歌山県知事）が捕まってしまったんですよね。

寺島：そうだったですね。

仁坂：それで（次の知事の候補者を）探してたんじゃないかと思うんですよ。それで「君どうかね」というような有力政治家もそうだし、親が中小企業なんかしていたので、家族ぐるみの知り合いがいっぱいいるわけですね。その待望論がいっぱいあって、「義を見てせざるは勇なきなり」だなと思ったんですが、一つ懸念がありました。これは、やっぱり私もずっと故郷を離れていた。それで知事というのは、やっぱり滅私奉公で、全て県民のために一生懸命やらないといけない。自分と同じ目線でこの人たちのために働けるかなという疑問がある。ちゃんと仲間として認めてくれるかなと。３０何年離れている人をね。その二つがありますから、ちょっと知らない人の前で話させてくださいって言って、女性の前で、知らない女性の前で話をしたんですよ。そしたらものすごく波長が合いましたね。

寺島：なるほどね。

仁坂：これはと思って当時の貿易会の佐々木さんに「辞めさせてください」って言って、お願いをして、それで（知事に）ならせてもらったんです。

寺島：３０数年ぶりにふるさとに戻って、そこでもってトップをやるということに、果たしてどうなんだろうというふうに迷われたんですね、一瞬。

仁坂：そうですね。

寺島：そこからそういうある種の確認というか、何となく手応えを感じられて、そこで「じゃあやろう」って踏み込んで、それから１０年、こういう形で引っ張ってこられてと、こ

ういうことだと思うんですね。それで次の話題として、日本にとって、あるいは日本の歴史にとって、和歌山って何なんだろうということを全国的な目線で考えたときに、若干、僕のこの見方なんですけども、奈良、京都なんていう日本の都の南に控えて、熊野古道、高野山なんていう存在を持っている和歌山県というこの紀州っていうところが、歴史的に考えてみても「くろしお」っていう名前の列車が走っていますけども、黒潮の流れに乗って南からさまざまなものがこの紀州に流れ着いて、古（いにしえ）の時代にね、そこに蓄積されているものに対する畏怖みたいなものが、熊野信仰みたいなものになってきたんだっていうことを最近研究者の人から聞いて、なるほどなっていう部分があります。

仁坂：なかなか深いんですね。

寺島：深いんですよね。さらに、その空海がなぜ高野山を、っていう思いもあるんですけども、そういった南の重心みたいな感じで都を睨んでいたっていうか、その畏怖の気持ちっていうのかな、重さっていうのかな、それが僕は和歌山のＤＮＡみたいなものだろうと勝手に思っちゃったりして、それからもう一つ、紀州の殿様じゃないけども、八代将軍徳川吉宗に象徴される存在感というか、暴れん坊将軍なんていうイメージが非常に強いし、八代吉宗が江戸という時代を変えたのみならず、例えば、その蘭学の道を開いたり世界に向けて日本が目を見開くときに、大変大きな役割を果たしているということで、僕自分自身で調べてみて非常に感ずるんですね。吉宗の時代って。

さらに紀伊国屋文左衛門みたいな存在が、日本の商業というか、商いの世界における大きな存在感を持っていた。ざっと考えてみても、和歌山の歴史に持ってきた重みって重いなと思うんですけど、１０年、久しぶりにふるさとに帰られて、もう知事をおやりになってるんですけれども、「和歌山って何だ」っていうふうに聞かれたときに、今、仁坂さんはどう言うかなと思っていたんですけども。

仁坂：これは、私も全然そんなことを意識しないで、私は東京へ行って、そのまま通産省にお世話になっちゃったんですね。帰ってきていろいろ勉強すると、とんでもないことが続々と出てくるわけです、今。寺島さんなんて、もっと教養がお有りですから、もともとよく御存じなんですけど、地政学的に言うと三段階あると思うんですね。第一段階は、地形それから地理は、紀伊半島で南にポコンと突き出ていて近畿地方の南部です。と、こうなるんですね。地政学には三つの段階があって、第一は京都が中心であった時代。熊野というのは端っこなんです。山があって端っこで神秘なところで、それで先祖がいらっしゃる。そういうところなので、そこへ行って身を清めて蘇りをする。そうすると、また活力が出る。これが熊野古道とか高野山とか、そういうものがその時にある。

二番目は、実はその徳川時代を中心にして、今で言う新幹線、高速道路。これが和歌山を走っているんですね。

寺島：なるほど。

仁坂：何かっていうと、それは海の道です。海路の方が効率は陸路よりも圧倒的に高かった時代ですから、なぜ紀州藩が和歌山なんぞにいるんだと。なんぞというとちょっとムッとしますけれど、自分で思ったんですよ。思っていた。そしたら分かりました。これはね、陸路を握っているのは尾張徳川家でしょ。それから海路を握っているのが和歌山紀州藩なんですよ。大阪と東京の間がそれでギュッと行けるんですね。この役割だったんです。

寺島：それは紀伊國屋の話なんです。

仁坂：紀伊國屋がその上にいるし、それから多くのビジネスマンがそこにウロウロしているし、それから廻船問屋の名残みたいなものが関東にいっぱいありますよね。それから醤油屋さんが千葉にいるし、それからそうやって栄えていたんですね。その上に紀州藩が乗っかっていた。こういうことだと思います。ところがですね、それが国土軸が変わっちゃいましたね。交通の発達によって。そうすると、ちょっと和歌山の苦難の時代が今ずっと続いてきたということじゃないかなと思いますね。

寺島：これ僕自身が調べていて驚いたことあるんですけど、今、三重県になっちゃっているけど、松坂というところがかつて紀州藩の飛び地だったという。

仁坂：本居宣長は和歌山藩の人だったんですね。

寺島：そうなんですよね。ですから本居宣長の足跡を追いかけていると、何回も和歌山へやってきているんですね。そういう意味で「そうだったのか」と。「紀州藩の飛び地だったのか」と。そこが、本居宣長が国学の祖と言われているわけですけども、江戸の正学だった儒学に対して、儒学って中国の学問ですよね。それに対して、唐心（からごころ）から大和心（やまとごころ）へというやつですね。日本独自のやっぱり価値観とか物の考え方とかっていうものを確立するんだっていうので、彼の国学っていう世界を切り開いていくんだけれども、そういう類のものがやっぱり紀州との港運の中でもって、出来上がっているんだなっていうプロセスを感ずる時に、やっぱりその紀州というものが持っていた重み、そういう意味で、そこに仁坂さんが戻られて、紀州をまた見ているっていうのも、おもし

ろいなと僕は勝手に思い込んだんですけど。そこで、今度は和歌山の産業ポテンシャルという話にちょっとお話を進めておきたいんですけども、私から見ると、これ和歌山って経営者の方と話していても感じますけども、大変にユニークで、技術を持っていたり実力のある中堅企業、中小企業なんていうにはもう言葉を選ばなければいけないぐらい実績を持った中堅企業ですね。しっかりした形で存在しているっていうか、例えば、私の大変親しい和歌山の経営者協会の会長をやっている竹田純久（たけだよしひさ）さんという方が僕の親友で、三井物産時代の後輩で、例えば彼の会社なんていうのは、かつて顔料っていう、色を出す顔料の化学品の会社をお父さんの代から育ててきて極めてユニークな化け学の方の化学品の会社が、例えば本州化学的なところも含めて、いろんな形でもって存在しているっていうのが和歌山の強みなんだよなっていうふうに僕は思うわけですよ。さらに昨日その経営者協会の方とちょっと向き合ってみて改めて思ったんですけども、和歌山といえばといって出てくるのが、例えば梅干しとかあるいはその梅酒だとか、「和歌山といえば梅干しだよな」とかっていうふうに勝手に思っちゃったりしていると思うんですけども、中野ＢＣという会社のトップの中野さんという方と会ったら、ＢＣって何だと思ったらバイオケミカルだそうですよね。もともとその梅酒だとか梅干しだとかっていう世界におられた方が、まさに最先端のバイオケミカルのところに、その蓄積した技術を生かして、例えば、梅酒なんかでも、僕、実際に飲ませてもらってびっくりしたんだけども、梅酒って言えば甘っとろい酒で、我々はちょっと抵抗感があるかぐらいに思っていたら、もうその梅酒をベースにしたドライな、例えば焼酎だとかそういう世界も切り開かれてるし、まさに京セラが、セラミックなんていうところから昔の古い言い方を言えば、例えば陶磁器のような世界から京セラのような技術分野の会社を切り開いていったように、このポテンシャルとして、そもそもはそういう梅干しとか梅の会社だったのかっていうようなところが、どんどんどんどん新しい技術を吸収して、展開して、やがて世界的な企業になっていくような予感を持つような会社が、結構和歌山ってあるんだなって思ったんです。そういう意味で、知事の立場から和歌山の産業を見て、どういうふうに思われているかなと。

仁坂：これは、まさに同じように思っています。それは何でそんなふうになってきたかっていうことをちょっと申し上げますと、先程は、地形とか地理とか地政学とか申し上げましたけど、考えてみたら海に面しているわけですから、海って向こう側に繋がっているんですよね。

寺島：それは確かに。

仁坂：だから、刺激も入るし、それからいろいろ工夫していかないと、そんなに同じ仕事だけやっていれば何とかなるというものでもないというので、いろいろ培われて、その進取の気風とか、あるいは、工夫とか、ひらめきとか、そういう人達って多分ものすごい多いと思うんです。

和歌山っていうと、和歌山紀州藩、徳川家が偉そうにしていたっていうことになっているんですけど、明治維新後は、それが吹っ飛んでいるんです。その時に間をパッと埋めたのが、実は、産業革命の時代なんですよ。それで、特に繊維産業を中心にして、ものすごい勢いで伸びるんです。そこが、その緻密な商工業層を作って、それが和歌山の基本的な経済の力になる。しかし一方で、ちょっと気候もいいので、少しのんびりしてるとこもあって、ちょっと伸びると、あと上品な中小企業の経営者になって、悪なく行くぞという感じが若干ないところもあるんです。それで、和歌山の経済史を考えると、第二次大戦の前ぐらいに重化学工業化が起こりました。その時に、少し時代から取り残されて相対的地位を下げているんです。だけど、バカーンと爆撃でやられて、和歌山もやられましたけど、他所もやられていますよね。そこから復興が始まります。そういう時はまた進取の気風が生きるんです。それで、今度は今おっしゃったような化学の産業とか、機械産業とか、そういうのがうわーっと出来て、それで、現在に至るっていうところがあって。

寺島：確かに、例えば、明治以降の和歌山を振り返っても、とてつもない人が出てるんだなっていうそのシンボリックな存在が、僕にとっては南方熊楠なんです。田辺から、ああいう方が出て、大英博物館であれだけの実績を残し、ネイチャーなんていう雑誌に多分寄稿した日本人としては一番最初の人だって言ってもいいぐらいのお方だった。ちょっと計り知れない博覧強記の人で、彼の書き残しているようなものを見ると、それこそ、コピーマシンもない、インターネットもない時代に大英博物館で、大学ノート何百冊というノートを作って、持って帰っても来れなくて、自分の頭の中に叩き込んできて、それで南方酒造っていう酒造りのところの息子だったんですよね。

仁坂：御曹司なんですよ。

寺島：御曹司だったんですよね。それが弟にそれを任せて、そういう世界を生きちゃった方なんですけど、僕は、そのけた違いさっていうのが、普通の人の尺度に入らないようなけた違いさが、この和歌山から出て来ている人材の持つ、なにかある種の特色なのかなと。

仁坂：面白い人がいっぱいいます。例えば、稲むらの火の館というのがあって、これは、今、ヤマサ醤油、千葉にありますね。その祖先なんですけど、濱口梧陵さんという方。この方なんかは村人を助け、私財を投げ打って堤防を造り、それは、復興需要を喚起すると

いうような論理的な目的もちゃんと意識してやっているんです。それから、実はあの人、初代郵政大臣ですからね。それからコレラの退治とか、そういうところにも江戸時代にものすごく頑張っているんです。ものすごい強靭なんです。それから、松下幸之助さんは、和歌山出身ですからね。

寺島：そうか、なるほど。

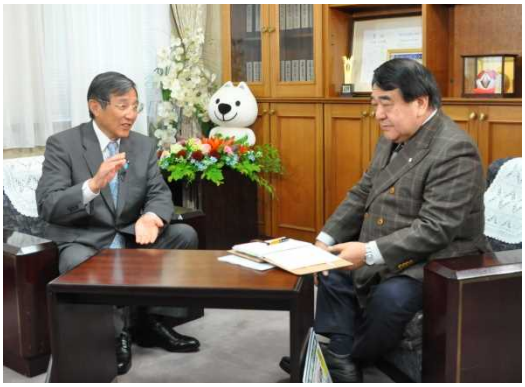
仁坂：だから、何か危機があって、いろんな要請があった時にそれに柔軟に対応して、がーっと頑張るというような能力は、皆持っているんじゃないかなというふうに僕は思ってるんですけど。

寺島：そうですよね。華岡青洲まで登場してきたわけですから、そういうことで、とりあえずその和歌山のポテンシャルをびりびりっと感じたところで、前半の話を終えて、後半は、県政の取り組みについて是非話を伺いたいと思います。

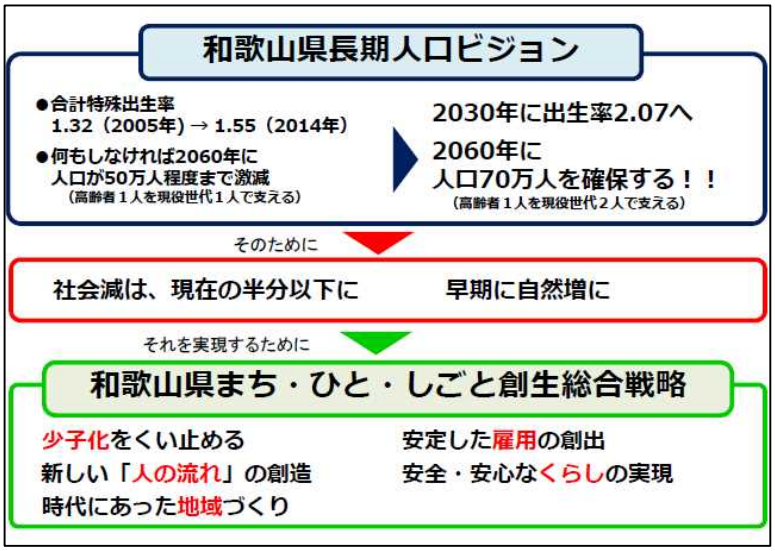
仁坂：よろしくお願いします。

【後半】

寺島：仁坂さんっていうと、それこそ昆虫採集の趣味の話まで含め、人間味豊かな方だから、その話に入っていくともう際限なく盛り上がってしまうんですけど、とりあえず、県政の話にちょっと話を乗せて、地方創生とか盛んに言われている時代なんですけども、今、その和歌山の産業政策「まち・ひと・しごと」なんて言われてますけども、どういう柱で考えておられるのかという辺りちょっと。



仁坂：はい。和歌山は、さっきからちょっとお話しているように、割合、戦後は早く復興してそれで発展していたんです。その後、ちょっと国土軸が変わったりして、ちょっと停滞が始まる。従って、どういうことかというと、お年寄りが多いんです。それで、今のフローに比べるとストックは割合あるんです。例えば、金融資産の量なんていうのは割合あるんです。ただ、先細りなんです。これじゃあいけないなというので、私が知事になった時からもずっと少子化対策を一生懸命やり、人口を増やす。その為には雇用も増やさないといけない。そういうことをずっとやってきたんです。だけど、地方創生のブームになって一つの流れができたので、この際、ストックテイキング（進捗管理）的にまとめてみようというようなことをやったんです。それが昨年の仕事なんですけども、（フリップを見て）そこへ簡単にまとめてきましたけど、例えば、長期人口ビジョン。これは、今９６万人ちょっと割ったぐらいの人口なんですけど、放っておくと５０万人になるんです。高齢化がどんどん進んできたところですから、それじゃあちょっともたないなと。７０万人ぐらいあったら、若い人たち２人に対して１人の高齢者を支えるというぐらいになって、これならいけるかなと。そうなるためにはどうしたらいいかというと、一般には、こういう時には社会減をゼロにしますとすぐ言います。だけど、考えてみたら先程の話もありますように、（和歌山県は）人材供給の県ですよね。世界で活躍してもらったらいいんです。だから、そういうところはあるんだけども、何か間違って、県外しかないと思って行って



いる人がいるんじゃないか。それは減らしましょうねと、いろいろな情報を提供して。それからもう一つは、自然増を早く達成しようじゃないかと。実は、和歌山県は、私が知事になった時に、合計特殊出生率が１．３２だったんです。それが、直近で１．５５まで行きました。たぶん伸び率は日本一なんです。ところが、自然増に行くためには、２．０７を達成しないといけない。２０３０年ぐらいまでに１．５５から２．０７へ飛び上がるんだと言っているわけです。そのためには、もちろん雇用も増やして、若い者たちが来られるようにしないといけないんだけど、あわせて、一戸当たりの赤ちゃんの数と子供の数を増やそう、少子化対策を大いにやろう。これが、今の「まち・ひと・しごと創生総合戦略」なんです。今年がその第１年目なので、結構、少子化対策が何種類かあるんです。

寺島：僕は、実は、日本総合研究所を率いて、県民幸福度ランキングなんていう分析をやっていて、実は２０１６年版が間もなく出てくるんですけども、和歌山がトップ１０に入ってくるような項目って何だっていうと、例えば、医療とか福祉。例えば、精神的に障害を起こしている人の数が非常に少ないだとか、持ち家の比率が全国で６位。つまり自分で自分の家を持って生活している人の比率が高いとか。全体感として、例えば若い人なんかが新しく働く場なんていうものを考えている時に、和歌山の持っているポテンシャルっていうか魅力、和歌山の持っている実力をじっと見つめたら、和歌山で頑張ってみようというような人がもっと増えてもちっとも不思議じゃないというか、これだけのポテンシャルと魅力のある地域というのもなかなか全国でも珍しいよっていうぐらい、僕はこれを分析していて、ふと思うんです。

それが、今おっしゃっている人口減を食い止めて、和歌山をより浮上させようという考え方に繋がってくるのかなあ、なんてこう思っているんですけども、そういう中で話をちょっと一歩進めて、観光っていいますか、この産業を今後どうしていくっていう時に、私自身、そのサービス産業の高度化が、日本をこれ以上豊かにするためにはどうしても必要だと。とりわけそのサービス産業の中でも、観光っていうのが、去年インバウンドがほぼ２０００万人に迫ってきたなんてこともあって、海外からの来訪者も取り込んで、観光産業の柱に持って来て、それで、より豊かな地域を作っていくっていうのが、これからの地域経済にとって課題だと思うんです。和歌山は言うまでもなく、観光資源という意味においては、熊野古道や高野山を持ち出さないまでも、非常にポテンシャルな、白浜も含めて持っておられる。そういうことに関して、産業政策っていうと、とかくモノ作り産業の方に議論が行くんですけど、それはもちろん大事だけども、新しい視点で、じゃあ、若い人達を引き込もうにも、新たな産業の目玉としての観光産業について、仁坂さんが今、考え

ておられることをその辺りをちょっと話したい。

仁坂：実は、これまた過去の栄光と今後というのがあるんです。実は、観光資源ものすごいあるでしょ。昔、和歌山って大観光地だったんです。新婚旅行で和歌山へ行きましたという人が圧倒的に多いんです。白浜なんか行きましたと。

寺島：分かる、分かる。那智の滝。

仁坂：今でも年間宿泊客の最高の時は昭和４８年なんです。だけど、そこからズルズルズルズルと下がってきてるわけですね。その結果、いろんなことが起こって、例えば、地元で、特にバブルのときに、投資をした企業はバタバタ潰れて全国的なチェーンのホテルになっているんですけど、そうすると、割合、安い人達をたくさん連れてこようという政策になったりしているんですね。そうするとその観光というと、すごい花形なような気がするんだけど、実は一人当たりの所得が少ない層がたくさん増えてしまっているというところも悩みなんです。あまり贅沢なことは言えないから、とにかくたくさんの人を、まず来てもらわないといかんということで頑張ってきたわけです。これはネックがありまして、没落してきた理由の一つなんですが、インフラがやっぱり不整備なんですね。特に自動車の関係のインフラが随分だめだった。それから、やっぱりホテルをいっぱいにしておいて、みんなホテルの中へ呼び込んで、１泊２食で宴会をしてもらえば、団体を呼んで来れば良いんだよな、というような、そういう雰囲気が随分あった。それからやっぱりＰＲですね。我々が持っている観光資源をいかにアピールしていくかっていうことについて、そんなに熱心であったかなというと、そうでもない。これを全部ひっくり返していけば良いんですよね。ですからインフラを一生懸命やりましょう。誘客も一生懸命やりましょう。それから新しい観光のビジネスですね、そういうものもやりましょう。

それから観光資源の発掘もしていかないといけない。例えば、パンダなんていうのは東京の人はほとんど知らなかったですね。和歌山にいっぱいいるんですよ。

寺島：そうですよね。９匹いるんですって。

仁坂：今は７です。どんどん中国に生まれては返し、生まれては返し。

寺島：ああ、そうかそうか。びっくりする数ですよね。それで、観光は、正におっしゃっているように、より付加価値の高い観光へ、つまり２泊３日で３万円の人達をかき集めるんじゃなくて、ここでより多くの付加価値を見出してくれて、この産業で働いている人たちがより潤うような産業基盤に観光を持っていくっていうのが、これから全国の観光をターゲットにしている県の、僕は大変重要なテーマだと思うんです。

今、知事が、インフラっていうことを、やっぱり観光をやろうにもインフラ基盤を整備しないといけないと。そのためにはチラッと道路の話をされましたけども、実は、仁坂さんと小生の議論の中に、今までも和歌山の道路インフラの話を積み上げてきて、私、国土交通省の道路の方の委員会の座長なんかをさせられているもんですから、和歌山のその道路インフラが、ミッシングリンクという言葉がありますけども、全国的な視点からすると、これからの課題だっていう大変大きな、紀伊半島の道路インフラどうするんだというのが、全国的に見ても大きなテーマだと思っているんですけど、そのあたりをちょっと。

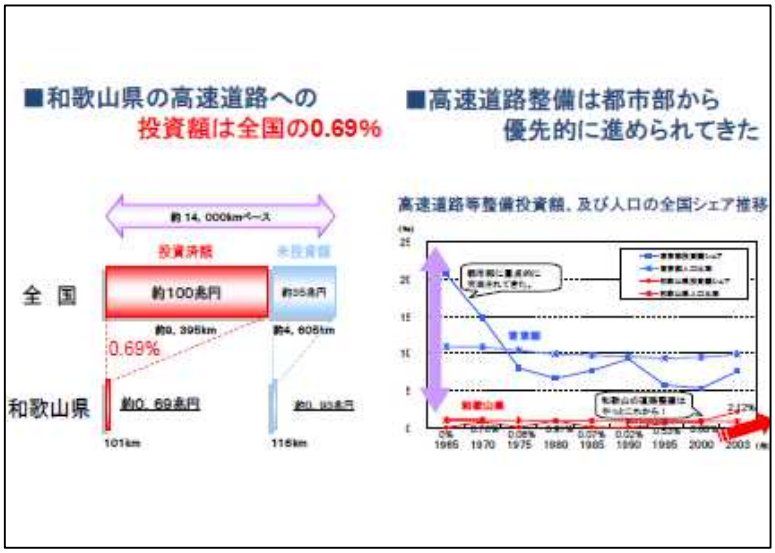
仁坂：はい。実はですね、和歌山県は高速道路の充足率ということを考えますと、常に（下から）トップ３に入る（H27.3 まで）。ちょっと出来てはこう上がったりして下がったりする。例えば紀伊半島一周の道路も、うんと北の方でもう終わっているし、それから京奈和っていうのができることになっているんですけど、それもできていなかったですね。

そうすると鉄道の時代から自動車の時代になったときに、やっぱりそれは大変具合いが悪い。それから最近、製造業なんかも考えても、すぐ持っていかないといけない。それからお魚を考えてもすぐ持っていかないといけない。そういうことになって、我々ずいぶんチャンスを逸していたところがあるわけですよ。

それで、和歌山の高速道路の投資額は、少し前の統計なんですけど、その当時で全国の０．６９％しかなかったんですね。

寺島：うん、なるほど。１％もないということですよね。

仁坂:我々の人口比率で言うと、０．８ぐらいなので、だから、もっとあっても良いよねという、まあ田舎は後回し、というのが多かったと思います。やっぱりものすごい東京にまず投資しているんですよね。東京オリンピックの前なんて、もっとやっていたと思いますね。それから、幹線があり、大阪とか名古屋とか仙台とかそういうところに、繋ぐ道を造っていって、紀伊半島のあたりというのはやっぱり後回しにされた。ようやくこれからというのは、実は今の時代なんですね。現政権なんかは、そういうことを一生懸命やってくださっているので、大分出来てきたんですけど。



もう一つは、これは和歌山の道の関係で言えば、和歌山自身が大変悪いところがあります。これは、私は「ブツブツ率」と言っているんですけどね。ある区間を設定したときの計画区間の未完成率の足し算が日本一なんです。だから、ちょっと要求があったらぱっと作り、ちょっと要求があったらぱっと作り、体系的なネットワークを県内に造るんだという意欲が不足していたと思いますね。それで、これじゃあやっぱりみんな孤立して駄目になっていくんですね。うちの前の道が良くなってきたからと言っても、それが繋がってなかったらどうしようもないですね。それをものすごく一生懸命整えてきました。

寺島：そうですよね。１０年間に、それに大変専心されて頑張っておられることがわかってるわけですが、確かに、観光をやるにもですね、インフラの基盤としての道路ネットワークをしっかりさせないといけないっていうこともあるわけですけども。道路っていうのは、観光のためだけの意味だけではなく、東日本大震災を食らってみて、この「命の道」っていう言葉にこだわっているわけですけども、やっぱり防災とか減災とか、そういう文脈でも、道路っていうのは非常に重要なんだよと。

そこで、和歌山県が非常に力を入れてられることに気になるのが、南海トラフなんかを視界に入れて、防災に向けていろんなことを前広に手を打っていこうということに努力されているって気がするんですけども、その話をちょっとしていただけますか。

仁坂：実は、南海トラフの大地震が必ず起こるものですからね。和歌山県は、そこから「命だけは絶対助けるぞ」という目標を持って、一生懸命やっているんです。

東日本大震災があって、（被災地に）応援に行き、それから様子を見ていると、これは大変だと。そこから教訓がたくさんあるので、どんどん整備していったんです。

ところがその半年後、この和歌山で紀伊半島大水害が起こったんです。これは県民力を合わせて頑張ったので、割合、早期に完全復旧できているんですよ。そうするともう忘れられて、「そんなのあったっけ？」と、こうなるんですけど、実はそのときに、みんなから褒められたんですね。全国から「早くて偉いね」と。ところが、やっぱり６１人亡くなっている（死亡５６人、行方不明５名）。その時に。だからこれは、いくら褒められても、この人たちの命はかえってこないですね。だから、とにかく大地震が起こっても水害が起こっても、犠牲者、亡くなる方、これだけは絶対ゼロにするんだ。

そのために、例えば津波の時には逃げなきゃいけない。逃げ方を科学的にリスク評価して、避難場所をゴロッと入れ替えたんです。半日で良いんだから、高いところへ逃げるようにしよう。それで立派な道はいらないから、人一人、駆け上がれるようにしようと言って、避難路が７００近くできたんです。

最後の問題が、実は、（フリップを見て）これなんですけど、津波到達時間が、和歌山県は静岡県と並んでものすごく早い。南海トラフが潮岬のすぐ先にある。だから巨大地震で言えば３分ぐらいで到達するところの町がある。これはまあ、岬の先ですけどね。

寺島：あっという間に来ちゃうわけだ。

仁坂：あっという間に来ちゃう。それで、５分間はおたおたするだろう、それで時速１．８キロで逃げるであろう、という想定でやると、やっぱり避難困難地域というのが出るん

です。この巨大地震というのは理論値最大なので、もう一つ、（フリップを見て）ここに書いてありますけども、青いところは過去最大の地震。これは、東海・東南海・南海地震が一気に起こったときに、三連動って言いますけれども、そういうような、過去で言えば宝永の大地震ですね、このぐらいの想定でやった時でも、４町２２地区が、やっぱり逃げられない。この人たちは放っておくと、逃げようと思っても死ぬんですよ。これはまずいというので、それは今、最大の、我々にとっての宿題になっているんですよ。どうするかというと、まず、そこは明らかにしますね。もう露骨に明らかにして、そのあと岸壁、それから港湾ですね、そういうところをきちっとして、それでもきっと乗り越えてくる。だけど、何が意味があるかというと、時間稼ぎができる。そうすると余計、逃げる時間を稼げる。さらに内陸対策も大いにやろう。でも、その三連動の方はできているんですけど、巨大地震の方は今一生懸命やっている。だいたい１０年（かかる）。

寺島：この潜在しているリスクを明確にして、率直に伝えて、それを力を合わせて迎え撃っていこうという流れを作っておられるところ、誠に印象深く聞いたんですけれども、いずれにしてもですね、今日お話を聞いて、やっぱり１０年間、仁坂さんが知事をやって、独特の、やっぱりその空気間でこの地域を変えておられるな、ということを確認できたことで、今日お話を伺って良かったと、また思っているわけですけども、本当に今日はどうもありがとうございました。

【総評】
寺島：紀州和歌山の話、発見もあったでしょう。

アシスタント：そうですね、いろいろあったんですけど、昭和の新婚旅行の人気スポットだったというのがびっくりしました。

寺島：そうでしょう、昭和４８年がピークだったと言っていましたけども、ちょうど僕が新入社員として社会参加したあの頃は、確かに南紀白浜とか、九州の宮崎なんかが、まだ海外旅行に行く前の段階で、新婚旅行のメッカだったんだなあ、なんていうことで、今思い出していたんですけども。
　それでこの知事シリーズも、この番組始まって以来、７人ぐらい積み上げてきて、僕なりに思うことは、地方は、知事によって変わるっていうか、仁坂さんが、こうやって例えば南海トラフに立ち向かっていく防災なんていうことを軸にして、本当に一生懸命やっておられると。知事は、滅私奉公という言葉を使っていましたけど、その真剣さ。今、たまたま何も皮肉とか嫌みで言うわけじゃないけど、東京都知事なんて、最も恵まれているはずの財政を背負っている知事が、何ともつかない悲しいテーマに引きずり込まれているっていう、そういうことから考えると、やっぱりこの地方にとってリーダーっていう重要性。

このリーダーを選んでいるのは国民なんですけども。そういう意味では、知事シリーズを積み上げることに、知事の力量と、やっぱり見識、人品骨柄、真剣さによって、その地域は変わるんだなということに思いを新たにして、今日は仁坂さんと話をしてみたと、そういう気がします。